

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：27103

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720269

研究課題名（和文）日本語教育における「表現文型」の概念整理と総合文型索引の作成

研究課題名（英文） The study of 'hyougen bunkei(sentence patterns for communications)' in Japanese Language Education :A Conceptual Review of 'hyougen bunkei' and the establishment of sentence patterns list

研究代表者

橋本 直幸 (HASHIMOTO NAOYUKI)

福岡女子大学・国際文理学部・講師

研究者番号：30438113

研究成果の概要（和文）：

現在の日本語教育の分野では、「表現文型辞典」という語を冠した（またはそれに類する）辞書が数多く出版されている。本研究では、この「表現文型」に関し、その語が指し示す概念、定義、およびその外延を、既存の「表現文型辞典」やそれを巡る先行研究から明らかにし、また既存の表現文型辞典から総合索引を作成した。具体的には以下の2点を重点的に行った。

(1) 「表現文型」の定義・概念をめぐる研究

現在出版されている「表現文型辞典」類を見ると、「表現文型」を明確に定義しているものはほとんどなく、そこに収録されている語からその概念を推し量るしかない。7冊の表現文型辞典を精査した結果、「一般の国語辞書では引けない」文型や、また、中級以降の「複合表現、複合辞」を「表現文型」としているものが多く、これが現在の共通認識であると言える。（ただし、これは、「表現文型」を「構造文型」に対するものとして明確に位置付けた寺村秀夫の定義からは大きく離れたものになっている。）

(2) 日本語表現文型データベースの作成

上記の問題意識に基づき、現在の「表現文型辞典」類でどのようなものを表現文型としているか、各辞典に収録されている文型をリストアップし、データベース化した。辞典により文型の表示の仕方が異なるため、共通する文型の表記の統一および文型のバリエーションなどについて、ルール化を行い、データベースを作成した。

研究成果の概要（英文）：

In the field of Japanese language education, many dictionaries named 'hyougen bunkei jiten' with have been published. The purpose of this study is to examine 'hyougen bunkei (sentence patterns for communication)' as technical term, and to establish the sentence patterns list.

The following results were obtained: 'hyougen bunkei' as technical terms has been recognized sentences that we can't consult in a dictionary, or been recognized 'fukugouji'(compound particle). I also established the 'hyougen bunkei list'.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：日本語教育、表現文型、複合辞、索引

1. 研究開始当初の背景

日本語教育（日本語学）において「表現文型」という考え方が最初に明示的に示されたのは、昭和19年の『日本語表現文典』（国際文化振興会）である。そして、その後の寺村秀夫による論文「構造文型と表現文型」（1989年）や同氏を中心とする筑波大学日本語研究会の日本語教科書『日本語表現文型・中級』（1983年）により、「表現文型」という概念が日本語教育に浸透したと言える。しかし、近年相次いで出版されている「表現文型」という名のつく辞書（用例辞典）を見てみると、当初の（構造文型に対する意味での）「表現文型」という意味合いは薄れ、「複合辞」や「やや複雑な表現」「国語辞典には載らない複合表現」を指して「表現文型」とする考え方に変わってきている。このような考え方の変化の背景には、初級の日本語教育では、「名詞文」「動詞文」「格助詞」「形容詞文」「テンス（現在形／過去形）」「アスペクト（～ている）」「受け身（～（ら）れる）」など、その学習項目と提出順序に一定の共通理解がある（また、その見直しもされている）のに対し、中上級レベルになると、「初級よりもやや難しい表現」「複雑な表現」「複合表現」とだけ言われ、具体的にどのような文法項目が指導・学習されるべきか明らかになっているとは言えない、という現状がある。中上級日本語教育で求められる「コミュニケーション能力の向上」と、具体的な中上級の文法項目が結びついて、「表現文型＝複合辞」という考え方に変わってきているものと考えられる。従って、「表現文型」という語について改めて、その概念や外延を整理する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、近年相次いで出版されている日本語教育（主に中級から上級）のための「表現文型」というタイトルのついた辞書の見出し項目をリスト化し、相互に付き合わせたのち、総合索引として一般に公開することを目的とした。1990年代以降、「表現文型辞典」という名の辞書が複数出版されているが、そこで扱われる表現は様々である。本研究では、日本語教育用に出版されている「表現文型」辞典類8種の見出し語を突き合わせ、データベース化し、総合文型索引として公開することを目指す。公開は冊子およびweb上で的一般公開とし、日本語教師、日本語学習者、言語研究者に広く利用可能なものとする。なお、

見出し語の配列は従来の五十音順ではなく、「表現文型」という語に忠実に、表現機能別に配列する。このことにより、日本語教育に必要な表現機能とは何かを改めて提案することも可能となる。

3. 研究の方法

以下の8種の「表現文型辞典」を対象とし、そこで扱われている「表現文型」の見出しを突き合わせ、総合索引を作成する。また、それにより、各辞典が「表現文型」をどのように認識し、定義づけているかを明らかにする。作成した総合索引はweb上、また冊子のかたちで公開し、日本語教育の現場、日本語学の理論的研究として役立てることを企図する。

理論的研究としては、なぜ寺村が定義した「表現文型」が曲解され、なぜそれが現在の日本語教育現場で共通認識となっているかを明らかにしていく。

対象とする表現文型辞典は以下の通りである。

- (a) 森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』
- (b) 坂本正（1996）『学習者の発想による日本語表現文型例文集 一初級後半から中級にかけて一』
- (c) 池松孝子・奥田順子（1997）『「あいうえお」でひく日本語の重要表現文型』
- (d) 石橋玲子（2007）『多様な日本語母語話者による中上級日本語表現文型例文集』
- (e) 友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2007）『どんなときどう使う日本語表現文型辞典』
- (f) アスク出版編集部（2008）『“生きた”例文で学ぶ！日本語表現文型辞典』
- (g) 岡本牧子・氏原庸子（2008）『くらべてわかる日本語表現文型辞典』
- (h) グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』

4. 研究成果

(1) 「表現文型」の概念整理

ここでは、対象となる8冊の表現文型辞典について、そこでの「表現文型」の定義や語の収録方針をもとに、現在の日本語教育現場で「表現文型」という概念がどのように認識されているかの調査を行った。

寺村（1989）では「表現文型」は「構造文型」に対するものとして「いろいろな日常生活場面、仕事の場面で、どういうことが言いたいとき、どういう表現を使えばよいか、という機能的な方向からの文の型」と定義し

ていた。しかし現在の日本語教育現場ではその意味合いは次第に薄れていき、いつの間にか、「辞書で引けない表現」「複合辞・複合表現」という点ばかりが目立つようになっていった。本研究ではこの現状について確認した。その理由として、これら表現辞典類の多くが、中級・上級学習者を対象としていること、また、以前に比べコミュニケーションのための日本語教育が叫ばれるようになってきたとはいえ、やはり初級で扱う文型は「構造文型」が中心であり、中級・上級ではそれ以外の文型が必要である、という認識によるものであると考えられる。またその一方で、従来から言われているように、初級では、文の組み立てに関わる基本的な文法項目を指導するということが共通認識として根付いているが、中級以降は「やや複雑な表現」「やや難しい表現」といった共通認識がなく、その学習項目もさまざまであると言われている。この両者の考え方が重なり、「表現文型」＝「やや複雑な表現」（つまり「辞書では引けない」表現）と結びついていったものと結論付けた。

(2) 「表現文型」総合索引の作成

対象とする辞書の収録語数と機能別索引の有無については、以下のとおりである。

	文型数	機能別索引
(a)	1134	有
(b)	253	無
(c)	769	無
(d)	80	無
(e)	630	無
(f)	335	無
(g)	765	無
(h)	2567	有

以上のデータに基づき、各辞典で挙がっている文型の相互つきあわせと、(五十音ではなく)機能別配列への並び替えを行い、総合索引の作成を行った(当初、web上と冊子媒体での公開を予定していたが、検索の際の利便性などを考慮し、web上での公開のみとすることにした。なお、公開にあたっては現在webページ作成途中である)。

(1) 表記の統一について

同じ文型であっても、互いに表記が異なっており、統一する必要性があった。本研究では、最も収録語数の多かった(h)『日本語文型辞典』を基礎データとし、それにあわせるかたちで他の文型辞典の表記の統一を図った。

(2) 「機能別」配列方法について

機能についても、(h)『日本語文型辞典』ですでに「意味・機能別項目索引」があり、それに他の新規項目もあわせている。意味・機能の総数は113である。ただし、この機能

に入れにくい文型については、現時点では保留となっており、新しく意味・機能を設定する必要がある。また、『日本語文型辞典』の意味・機能についても見直す必要がある場合も考えられるが、今後、引き続き改訂作業を行うこととし、今回はこの辞典にのらない索引を作成した。

(3) 「構造文型」との関連

当初、重点的な課題とはしていなかったが「表現文型」の対立概念となる「構造文型」についても、とくに日本語教育の面から考察を行った。日本語学・言語学的視点からは文型は、「表層レベルの構文」(ガ構文、ガ・ヘ構文、ガ・ヲ構文など)と「深層レベルの構文」(動作主、経験者、対象、受け手などを明示する構文)と大きく分けることができる。しかしながら、日本語教育の立場からすると、これらの構文・文型リストが列挙されたとしても、文の産出にはつながらない。深層格を示したところで、(動詞は一般的にリスト化されることが多いが)、補語となる名詞にどのようなものが入るかがリスト化されていないことが多いからである。

そこで、日本語教育用の構文として、上記二つのタイプとは異なる「辞書の意味カテゴリーに基づく構文」が重要であると考え、このタイプの文型リストを語彙リストと併せた「文型・語彙リスト」として発表した(橋本他(2013)『実践日本語教育スタンダード』)。

具体的には100の話題を設定し、その話題で必要となる語およびそれらの語をもとに作られる文型を叙述文型、修飾文型とに分け、提示した。

例として「食」という話題における文型を以下に挙げる。

1.1 食(分野:文化)

1.1.1 食名詞

1.1.2 飲食構文(叙述/修飾)

1.1.3 調理構文(叙述/修飾)

1.1.4 外食構文(叙述/修飾)

1.1.5 健康構文(叙述/修飾)

各文型の詳細については、ここでは省略するが、まず名詞リストがあり、それに対応するかたちで各文型が記されている。たとえば飲食構文では、「食べる、召し上がる」などの動詞に対応する文型として「【食べ物】【食事】【料理名】をV」のようなかたちで表示してある。

このようなかたちで100の話題について、すべて名詞リストと文型リストを挙げている。文型数は、すべての話題を総合すると、446文型である。

この構造文型の研究と表現文型の研究のつながりであるが、現時点ではまだ着手していないが、表現文型についても同じ方法で記述する必要があると考えられる。つまり、表

現文型においても、文型だけを示すのではなく、そこにどのような語や節が入りうるのかを明示する必要がある。それによって、真に教育現場で使われる（産出に結びつく）文型の表示が可能となる。また、表現文型は今回のように機能別に示し、リスト化するのが一般的であると思われるが、話題別に示すことができるのかを検証することも必要であろう。これからの課題としたい。

(4) 総括

申請時点からの研究代表者の所属変更に伴い、人的・時間的制約が生じたことで当初の目的を完全に達成しているとは言い難い部分もあるが、総合索引の作成、修正等は引き続き行い、近く web 上での正式公開に漕ぎ着けたい。表現文型に関する理論的研究においては、従来の辞典類の記述方針や収録文型などの検討を行い、当初の仮説通り、寺村の「表現文型」という概念とのずれやその原因について考察することができた。日本語教育において「表現文型」という語が独り歩きしている現状については、該当する文型が相互に食い違いが見られるということはなく、共通して「複合辞」を「表現文型」と見なしているということが明らかになったが（その点では問題がないのかもしれないが）、その一方で、本来の「表現文型」に関する研究や考察が進展しないという点ではやはり問題であり、今後、術語の再定義や改定などを積極的に提言していく必要があると考えられる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- (1) 橋本直幸、語彙中心型ロールプレイの認定に関する一試論—形態素解析の結果から—、香椎潟（福岡女子大学国文学会研究誌）、査読無、58号、2013、横 1-11
- (2) 橋本直幸、日本語教育における「表現文型」の定義をめぐって、香椎潟（福岡女子大学国文学会研究誌）、査読無、56・57 合併号、15-23
- (3) 橋本直幸、学習者コーパスから見る超級日本語学習者の言語特徴—2つの観点から—、日本語教育文法のための多様なアプローチ、査読無、2011、241-257

〔学会発表〕（計 3 件）

- (1) 橋本直幸、日本語の記述的研究に対する学習者言語の貢献、第二言語習得研究会全国大会（パネルセッション）、2012、12、15、明海大学
- (2) 橋本直幸、実質語の使用実態と指導項目の選定、国立国語研究所共同プロジェクト「学習者コーパスから見た日本語習

得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築」研究発表会、2011、12、23、国立国語研究所

- (3) 橋本直幸、大規模コーパスを日本語教育に生かす—教育語彙表作成の試み—、第 56 回福岡女子大学国文学会研究大会、2011、7、2、福岡女子大学

〔図書〕（計 1 件）

- (1) 橋本直幸、金庭久美子、田尻由美子、山内博之、ひつじ書房、実践日本語教育スタンダード、2013、679

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本直幸 (HASHIMOTO NAOYUKI)
福岡女子大学・国際文理学部・講師
研究者番号：30438113